

あしまよりみゆるながらの橋ばしらむかしのあとのかたみなりけり
此歌の心にてはつきたる儀なり、一には歌に云、

つこの國のながらの橋もつくるなり今はわが身をなに、たとへん
君が代はながらのはしのちたびまでつくりはて、もなをやふりなん

と云歌の心なり、此儀にて候なり、兩儀ともに不違、其謂には古今拾遺の中の間の時代をかぞふれば、世は六代、年八十一年にあたれるなり、されば此序は、かの橋を作りかへられし事をかき、拾遺には、かのはしの八十餘年が間に、くちにける事と證するにや、玄かるにふじの山は煙た、すながらの橋はつくるといふべきに、さはか、で、た、すなり、ながらの橋もつくるなりと聞は、歌にのみぞと云へるなり、和歌の道をひろくおもく申侍りけるなり、古今にも此心なるべし、

〔奥義抄 下ノ中〕難波なるながらのはしもつくる也、今はわが身をなに、たとへん

此集古今雜部に、世中にふりゆくものは津の國のながらのはしと我と也けり、といへる歌を本にてよめる也、誠に橋をつくるにはあらじ、かくたとへきたるにまかせてわが身のたぐひなきよしをいはんとて、彼はしもつくるなりとはよめる也、

〔拾遺和歌集八〕天曆御時、御屏風の繪に、ながらの橋の橋柱の僅に残れるかたありけるを、

藤原清正

あしまよりみゆるながらの橋柱昔のあとのゑるべなりけり

〔信明集〕長柄橋

心だにながらのはしはながらへん我身に人はたとへざるべく

〔榮花物語三十一〕殿上花見、二日長元四年、日うちくる、ほどに、歌よませ給ふ、すみよしの道に述懐と

いふ心を、略中